



ランス大會堂 (口繪解説63頁参照)

三方爲冠蓋。天下榮之。

④同卷五二張昭傳及卷三八許靖傳參照。

⑤同、許靖傳末尾の注に魏略を引き、それに魏に仕えていた王朗からの三通の手紙がのせられている。彼らの魂の温かい交流がその中に感じられるように思う。

⑥三國鼎立のまゝ再び漢代の如き普遍的國家に復歸し得ないことが明白となるにつれて、士大夫の關心は政治より純粹に思想的なるものに向う。魏晉時代に盛行する清談はそれであり、これについては次の機會にのべることにし、唯宇都宮氏「世説新語の時代」(東方學報京都第一〇册二分)及び板野長八氏「清談の一解釋」(史學雜誌第五〇編)を參照されたい。

⑦唐書宰相世系表參照

⑧趙翼「廿二史劄記」卷五「四世三公」參照

⑨外戚馬・陰・竇・梁・鄧の諸氏及び皇室と姻戚關係にある樊・耿・來・寇・岑の諸氏はその家系の永續と、中央に於て保つた累代の高位とによつて貴族として取扱うべき存在である。一々の系譜をあげるとは略す。後漢書各傳を參照されたい。

⑩樊氏・陰氏は光武帝の姻戚、鄧禹はその友人であり、來氏も光武の家と親戚である。

ランス大會堂 (口繪表參照)

ランスの大會堂は、クロヴィス以來歴代のフランス王が戴冠式を擧げる會堂であつた。最初の會堂が火災にあつたため一二一年に再建工事が始められ、完成せられたのは十四世紀の初期である。寫眞に示すのはその再建のものであつて、現存する最も代表的なゴシック建築である。ゴシック教會堂、それは單に神の世界の象徴であるのみでなく、石材を合理的に組織する事によつて自然の法則、神の秩序を具顯するものである。従つて會堂正面を飾る無數の彫刻も亦完全に會堂建築の秩序に服している。十三世紀の西ヨーロッパ人は、人間の知性を自覺し、自信をもつて宇宙を注視し、人類及び宇宙全體についてのがい博な知識をもつた。だが彼等はその知識を神を中心とする體系に築き上げたのである。宇宙は神の攝理であり、藝術はこれを象徴する。すべての形態は數の法則、意義の系列に従ふ。我々はここにゴシック・ヒューマニズムの限界を見出すのである。